

# 外國語としての日本語

藤本榮治郎

## 沿革

わが日本語を母國語としない異民族に日本語を教へた歴史は遠く臺灣に於て始まり、明治二十八年七月時の學務部長伊藤修二氏によつて臺北縣芝蘭芝山に學堂を設けられたのが外地に於ける日本語教授の濫觴であつて爾來全島内に傳播し、三十九年朝鮮に於て時の參與官三千忠造氏が各科教科書を日本文で作し普及に着手せられた。之より先三十七年關東州に於ては戰艦末だ收まらざる金州に於て南金書院私立小學校が創立せられたのが嚆矢であつて、漸次滿洲領土内に波及し其後滿洲事變後獨立と同時に滿洲國は日本語を國語として採用したのである。而し臺灣、朝鮮、關東州は共に對象は異民族なるも、政治的には日本の領土であり又領土の延長に過ぎないものであつて、日本語は國語として取扱はれたるに反し、外國語として日本語を異民族に普及せしめるは今回の事變後北支に於ける日語教育を以て始めとすと云つても過言ではない。

## 教授法の各様式

### 一、對譯式教授法

日本のことばを支那語に譯して教へ、その教授用語も又支那語を使ふ方法であつて語句の意味は早く解るが會話の力は決してつかない、唯讀解力が出来るだけであつて日本に於ける英、獨、佛語等の教授法と全く同一方法であるから支那語に堪能な日本人か、日本語に精通してゐる支那人のなすべき分野であつて支那語の餘りよくわからぬ吾々には出来ない所である。又對譯では出来ない助詞等の理解が不徹底に終るのも亦その欠點の大なるものである。

コレハ、私ノ鉛筆デス。ハ、對譯なし

這 我的 鉛筆是

現在北支に於て之の方法を用ふる學校は極めて少く時代の一つの遺物である。

### 二、自然式教授法

理論餘りに高尚であり内地に於て小學生を對象と

## 第一八三號目要

外國語としての日本語	藤本榮治郎	(一)
丈嶋雜誌	河村信一	(五)
統制と創意	角田好太郎	(七)
典籍散語	來島志朗	(八)
學内報		(九)
校友會報		(九)
學生欄		(二)
俳句部の思ひ出		(二)

### 三、速成式教授法

この方法は古くから關東州、滿洲を風靡し名實共

して教育する様に極めて自然的に教へる方法であつて、決して支那語を使はず終始一貫して日本語でのみ教授する方法であるから従つて長年月を要し早急の間に合はない。方法としては日本語の時間内はその教室全體を教材の言語環境に誘導し、全く自國語を忘れてすべて直接に教へる行き方であつて、椅子を指して「椅子デス」本を持つて「本デス」と第一歩を始め、すべて直接方法に依つて彼等に極めて自然に指導すると云ふのであるが、事物の名稱の如きは實物を持ち來つて教へる事も可能であらうが擬聲音から來た形容詞の「さや／＼」「かた／＼」などは如何に老練な人でも手足の眞似ではどうしても眞意を理解せしめられないのであつて又言語環境即ち教材環境を自然に作ると云ふ事すら大なる矛盾がある。又練習復習は不必要なものであつて唯時間内のみと限定してゐる、それは教材の内容が日本小學讀本と同様にして純粋な日本文なるが故である。此の方法は年少者を相手として長年月をかけてなす場合は最も理想的である。長所は多分に存するも實行し難き理論派であつて關東州、滿洲に於ても之れを實施するもの少き現狀である。

に完備して連成的に効果を現す實踐的方法である。事變翌年の三月、吾が天津に於て日語普及事業に着手した時、教育局顧問の岡部平太先生がこの速成式教授法の發明者大出正篤先生を奉天より招ぜられたのが北支に於ける日語界の嚆矢である。

以下この教授法を基礎として吾が師範學校に於て實施してゐる自己の教授の大略を記す。

- 甲 話し方時代
- 乙 話し方讀方併立時代
- 丙 讀方時代

甲、話し方本位時代

日本語教授の目的が會話力と讀解力とを併せ與へる事が必要であるが、兩者併立する事は困難である。先づ第一に會話の力を與へる事が必要である。この會話の力が出來て次に讀解の力を與へる事が必要である。そこで會話の力を與へるには如何にするか、然も效果的に連成的に好結果を収めるには如何にするかが吾等に與へられた研究目的である。それは熱心に教へさへすればよい、長年月を経てと云ふのではない。そこに方法と云ふか教授術と云ふか問題が残されてゐる。

一 體外國語が自國語同様に話せる様になるには如何なる段階を踏むかと云ふ事を考へて見ると、

- イ 判る(理解する)
- ロ 覚える(記憶する)
- ハ 使ふ(活用する發表する)

の順序である。教へる事が相手に判らなくてはならない。教材を理解させる事が何と云つても第一段階であつて、之れには相當の努力が必要である。次は

如何に理解が出來ても役に立たないから覺えさせる事が必要である。この記憶せしむる事にも又多大の努力が入るのである。更にそれを使はせる、發表させる事が重要な段階であつてこの發表せしむる活用せしむる事が吾等の最大目的でなくて何であらうか否單に日語界のみではない内地に於ける各學科に於ても教師一人のみの活動では全く成人教育であり、大學教授である。習つた事を理解し記憶せしめ活用發表實驗せしめて眞の教育目的は達せられるのである。吾々が會話に於て自由に驅使し得る言葉は單に理解してゐる言葉ではない。發表を繰り返した所謂使ひ馴れた言葉だけに限られるのである。即ちこの三つの段階を上り盡して初めて達せられる世界である。殊に母國語でない外國語を異國人種に教へるには言語環境の全く相異つた世界の言葉を教へる以上は「話す力を與へ度い」「會話の出來る様に早くしたい」と云ふ第三段階の結果を目的とし、理想としてゐながら、第一段階、第二段階の域を去り難い嘆き惱みが生じるのである。如何にして第三段階にまで達するかが吾人の研究對象であり、大きな目標である。この大きな研究目標即ち相手に「如何にして發表せしむるか」これが爲には對譯の可否とか文法の必要、不必要とか其の他種々な問題は第一段階か第二段階に屬するものであつて、發表が出來たと云ふ事に於てすべて解決されるものである。大出先生が「發表中心主義の教授法」と云はれるのも全くこの意味である。

この話し方時代に於ては語句の解釋讀方等に費す時間を節約するのである。即ち語句の讀方として漢字にはすべて表音的な振假名が付けてあり、語句、文の解釋は本文の下端欄外に別に全體の華文の本譯が附加されてゐるから、それを讀みさへすれば當然理解されるのである。故に最初は五十音から教へるのである。如何に話し方本位時代と雖も話し方に入る前提条件としてこの出發にあつて四、五時間をかけて基本語を教へる。發音上一言申すと日本語は閉音であるが、支那音は閉音であるから五十音と同時に閉音の口の形、發聲學を基本とした點を十二分に理解せしむる濁音のバ行と半濁音のハ行の發音が混同させて正確に發音出來ない、それで支那音の有機音と同様に掌上に白墨の粉をのせて其の手の近くで發音しその粉を吹き飛ばしてこの發音がバ行の發音なりと極端ではあるが指導すると効果がある様である。正確な發音を教へる事が將來に對する最も重要な事である

この五十音さへ教へて置けば本文は自宅で練習出來るし意味解釋下段の欄外に華文譯があるから簡單である。此の豫習、復習の習慣を最初から作り、徹底せしめて判る、覚えるの兩方面を完全に履行せしめて教室に於ては唯話しをする、問答をするのみに制限する。この際に發音、アクセントを正確に聴かせ又話させるのである。吾々が關甲の商業生の頃から千里山の豫科の時代前後八ヶ年を通じて英語なるものに苦しめられたが、英語の時間には讀む時間が非常に多い。否時間の半分は讀方、半分は解釋でそれで完了であつた。今自分が一外國人として異國人に日本語を教へること三年、うたゝ今昔の感に堪へない。殊に國際都市に職を奉ずる以上學校關係で歐米人に相接する機會が實に多いが、現在耳にする發音と自己の腦裡深くしみ込んでゐる發音と少からず相違があると同時に八ヶ年の勉強も何の役に立たず、簡単な會話すら出來ず止むなく第三國の支那語を持つて目的を達すると云ふ實に笑へないエピソードは繰返されてゐる。この自己の笑へない、體驗か

らして如何に彼等支那學生に日本語の會話を、平常語の話し力を與へるかに日夜苦心努力し教授法の研究を續けてゐる。何と言つても學校では限定された一定時間である。一週六時間と云ふ時間を出来るだけ有効に使用せねばならない。そこで日本式の英語教授の様に又對譯式の様には讀方解釋は絶體に取り扱はないでそれは自宅に於ける、寄宿舎に於ける練習である。その上又教室に於ては教科書を使用しない。唯毎時間教へる處は前の時間の復習と次の課へと順序よく進行して行くのである。全く理解、記憶は自己の努力に求め時間内に於ては會話のみで進むのである。この會話と言つても比較的手近な處の既習語彙より始めてその日の教材へと進むのであるから自分の發問と云ふ事に最も注意深き準備と熟練が必要とされ生徒の記憶の中から答へを引き出し誘導してこの誘導發問を繰返して自ら教育環境を作り全生徒をして同一教材を中心とした日語時間を構成するのである。

この際誘導發問に對して答へる處の言語發表と云ふものにも自ら次の段階が生じて来る。

イ 機械的發表

ロ 模倣的發表

ハ 創作的發表

の三段階がある。

(イ) 機械的發表と云ふのは「他人の思想を他人の言葉で發表する場合」である。一人の答へた事をその儘乙に類似して答へさせたり、又教材にある事を尋ねて相手にその教材の通りに答へさせる等は之れである。之は全く機械的發表であるが語學に於てはこの道程を利用する事が必要である即ち語彙や文型は教材の範囲内にのみ限定して行くのが妥當であるから止むなく機械的になる、之

れに依つて正確な日本語を正確に聴かすのであつて耳から正確に人らなければ決して正確な言葉となつて發表出来ないが故に十二分に聴方即ち耳の發達をなさしめ、それに依つて機械的に發表せしむるのである。實際問題を付言するとこの期間約八十時間、最初の中は一課を進めるに四十人を對象とする場合は約四時間、二十課位までに約八十時間を費して聴方、話し方を主として實施する、これが第一期であつて次期は漸次課程の進むと共に次の模倣、創作發表へと入るのである。

(ロ) 模倣的發表と云ふのは「自己の思想ではあるが表現すべき形式を知らない爲に他の發表形式を借用する」場合で斯く言ひたいが言へないから記憶してゐる他の言ひ方をその儘模倣してしまふ方法で前者(イ)より價值のあるものであつて次の段階へと進む過程である。

(ハ) 創作的發表は「思想も發表も自分の創作である」場合は最も價值ある本當の發表である、吾人の目的はこの發表形式である(イ)(ロ)の場合と雖もこの創作發表に誘導せんとする目的であつて繰返しく反覆してゐる間にこの最高目的たる創作發表に到着せしめるのである、例示するならば教材には「昨日公園へ行キマシタ」とあるのを「昨日日本租界へ行キマシタ」「昨日伯母様ノ家へ行キマシタ」と云ふ様に彼等の實生活、實際行動より引用して發表せしむるのが價值ある發表である。

故に教授の効果を擧げるには適當な教材の撰定である基礎となる語彙及文型は易より難に、簡單より複雑へと入ると同時にすべて論理的排列ではなく心理的排列を最も當然妥當と信ず、故に一定の教材的即ち文型、語彙より脱線して澤山な新ら

しい形式を教へるとなると相手方は新文型、新語彙の迎接に暇がなく單に理解せしむる程度に終つてしまふのである。理解だけでは發表練習即ち會話の力が出来ない結果となつてしまふが故に教材と併せ教授者の熟練が第一要件である。

現状としては一日でも早く日本語が分かる様にそして日常會話に事缺かぬ様にするのが吾等の目的であつて一時間教へれば一時間分の發表能力が出来、二時間教へれば二時間分の發表能力が出来なければならない、故に難しい發表は出来なくとも上品な語が出来なくとも、とにかく自分の思ふ事が言へてそれが人に通じ發音に誤りがなく間違がなければ良いのであると云ふ目的に向つて進みつゝある。而して決して先を急ぐものではない、牛の歩みの如く堅實に着々と熱心に歩む事に依つてのみ可能であつて常に反覆練習し既習語を常に引き出しては相手の記憶を呼び起こし發表表言せしめてその時その時に應じた自由な創作發表を誘導するのである。

乙、話方讀方併立時代

最初の話し方時代からこの併立時代に移り變る頃には會話力も相續練習せられた筈である。最初は話し方本位であるからその教材も從つて話し詞即ち敬體文であつたがこの併立時代に入ると文章も當然常體文に變化して来るから從つて内容も相等難解になり文型も又複雑長文となり新語彙の範囲も増加する此の時代に於ては與へられた常體文をそのまますぐに教へず先づ敬體文になはしてよく生徒に分らせ依然として話し方の練習をなしその教材全體の内容を取り扱ふて教材の基本に從つて創作發表せしめ、而後に讀方即ち朗讀法の練習に入るのであるが今迄一

度も讀みの取扱ひをした事がないので句讀點を極端みにしたり、切るべからざる處で切つたりこれが指導こそ又新たなる困難である。讀方と同時に文字、文章の正確度を増加認識せしむる必要がある。

丙、讀方本位時代

第二の併立時代に於て讀方法を解するが故に最初から讀方に入り而る後にその課全體の意味を發開し次はその内容にそつて創作的發表をなさしめる、この時代の讀方法即ち日本の小學校に於ける朗讀の測定も又必要である(イ)速度の標準即ち字音數による一分間のタイム、次は(ロ)正確度の標準、即ち誤讀、斷讀、連讀、再讀、脱讀、アタセント等を數字的に表示して正確度の觀念を作らしめ又(ハ)朗讀による鑑賞力の測定即ち朗讀を聴取らしめ、その鑑賞理解の度を測定せしめたり又(ニ)韻文などの朗讀の間に情操の陶冶に資せしめる等色々な問題が生じて来る。又之等と併行して作文、應用文の讀方日文華譯、華文日譯等の過程を経るのであるが、現在全天津に於て僅かに日語專修班のみが之の程度に進みつゝある現狀にしてその到達點は遙かなる彼方の存在であるが理想としては内地に於けると同様の取り扱ひによつて國文學のレベルにまで進むのが當然であらう。

日本語の難點

この間注意すべき事は音調の促音であらう。會つた知つた、言つた、等の如く又は雜誌、切手、一分、一般等はキテ、ザシと發音するがこれらの促音は中止音休止音で一音節だけ休止のタイムを取るものであるから手で一定の調子(四分の四拍子)の音を立て、音の休止を明きらかに理解せしむるやうにとめてゐる。

又支那語には無い日本語特有の助詞の困難さは教へる側も習ふ側も苦心の重點である、このガ、ハ、ヲ、ニ、ヘ、ト等になると何年教へても混同して少からず歎聲を發せしめられる「誰ニ孝行シマスカ」と發問すると「私ハ親ガ孝行シマス」と云ふ様な事もあり「今日ハ著イノ日デス」と助詞の不要所に助詞を入れたりする事が度々あるが左様な時には文型を示して一つの文型によつて名詞を入れ替へて反復練習せしめるより他に方法を未だ發見せないのは残念である。

又支那語に譯せない日本語特有の優美な言葉、敬語に至つては理解記憶は出來ても發表は出來ない、例へばイラツシヤイマスカと云ふ言葉にも何處へ「イラツシヤイマスカ」「昨日ハ家ニイラツシヤイマシタカ」「何日歸ツテイラツシヤイマシタカ」等は行く、居る、來るの敬語であるがこれを使はしめる事は至難である。又日本語の難しいと云ふ理由の一つは漢字の讀方である。一つの漢字に二つ以上の音讀があり二つ以上の訓讀があり、又熟語には音訓混讀があるだけでなく漢字の音や訓に關係の遠い否全く關係のない讀方も現れて來るのである(二十歳、一寸、下手、田舎、土産)之等の點に關して外地に居る者としては漢字の制限國語の統一と云ふ問題を聲高らかに叫びたいのであるが他日に割愛す。

結語

學校に於て習つた言葉を校外に於て使用、活用せよと奨めてもそれは不可能である。一生徒曰く「學校の日本語と日本語と少し違ひますから僅かしか通じません」と云ふ言葉を聞かされる時、然りと自の心に頷くのである。平素話す吾々の言葉、生命ある言葉、意志思想を相手に通せしめる吾々の言葉に、はたして何千語、何萬語數より成り立つてゐるが、學校で習つた言葉の内どの程度の應用が出來るか甚だ疑問

である。又反面、自國言葉なるものを深く反省する時日本租界、否全天津に集まれる日本人の言葉の集合であり方言の八百屋である、幾十種類の方言によつて構成された天津在住の日本人の言葉と學校で教へた教材的日本語なるものとの差異のある事は止むを得ないながら甚だ残念である。

靜かに自國言葉を見る時、日本古來の和語に加ふるに漢語あり、又歐米語の日本化せるもの等々雜然とした中に地方的方言あり又支那語的日本語が加味せられた世界的の言葉となつて天津に集まつてゐる。神代以來より使用し續けられた優美なる日本語の音節と音色はすべて外來語を陶冶してその掩蔽に引き入れて日本思想と化せしめたこの尊き言語界を背景として立つ吾等の使命は何ぞや、吾々は唯日本語をのみ彼等に教へるのではないその言葉を通じて言葉の底深く流れる日本思想、日本精神又文章を通じて日本事情、明媚な風光の紹介引いては日本人の情操の傳達を目的とし眞に皇道精神によつて育てられた日本人の眞の人間味を彼等に知らしめ情味溢れる愛の教育により師弟の關係をより深からしめ以て日支合同不離不滅の一體を味はしめ興亜建設の捨石となる基礎的情意を持たしめる様誘導する事こそ吾人に與へられた職務である。又見方を變へるならば、天皇陛下の萬歳を遺言として東洋平和の人柱となつた骨の上に築かれ再興された師範學校こそ皇道宣布の道場であり東洋道義の殿堂であるこの道場この殿堂よりして東洋の平和は確立せられるのである。「求めざる心によつてのみ永遠の平和は求められるのである、力を以て求めたものは力を以て奪回せられ、道によつて得たものは道に悖らざる限り喪はれないのだ。吾々は之の言葉を以てのみ子弟教育に對する哲理となすと共に、將來兒童教育の聖職に身をさしける若き教師を養成する日語教育精神の眞の姿であると確信する。(昭五、大法卒、天津市立師範學校教員)

丈嶋雜話

河村信一

南方問題は近時益々一般に注目せられ、内外兩南洋に向つての旅行者の數を増し、由て以て其他に關する幾多の研究が行はれて居る。甚だ結構な事であつて又大に奨励すべき必要がある事は勿論である。然しながら此れ等比較的遠隔の地と本土との間に、連絡點として重要な價値を有するに關らず、殆ど世人より忘れられたかの感がある地方がある。其の一例は所謂日本南方群島、此の名稱は海軍水路部で採用して居るものである。であつて、即ち伊豆大島から小笠原群島に至る各島である、此の諸島は大小を合して其總數〇〇に及び、面積又合計〇〇方里、人口は少いと雖も尙〇〇を超えて居る。(南方群島に於ける數字的の誤報は時局柄一切之を發表する事を禁せられて居る。山の高さ、海の深さは勿論人口、面積、距離、或は物産の産額等何れも〇〇を以て書かなくてはならぬ。此の點讀者の御諒解を得たいと思ふ)東京府の管轄にあるが故に、東京府に於て一切の施設或は産業の奨励助成等は行つて居る筈であるが、府としては管内の他地方と比較して甚しく遠隔にある關係からであらう、今一つ微濕的である様に思はれる。住民に對しても亦一般府民とは特別に扱はれ島嶼町村制が施行せられ、漸く本年から撰擧權が得られる様になつたのである。此の如き状態であるから同地方に於ける學術的報告も、一般案内畫的の單行本も數十年前のもの外は、寡聞にして之を見るものが無い。前進元より可であるが、先づ基地を固めてからの事ではあるまいか、此の意味から

今夏、之れ等の南方群島の大勢を見學すべく、一帆の風にまかして南航の途についたのである。元より短時日狭區域に於ける表面的觀察に過ぎなかつたが其の割合に得る處は少く無かつた。それ等の報告は之を他日の機會に譲り、茲には寧ろ副産物的の雜話だけにする。又都合により小笠原島に關する事項は省いて八丈島だけに限る事にした。

一、島物語

八丈島が流人の島である事は能く知られて居る。東京府八丈島支廳に藏する流人帳には浮田秀家以下明治初年に至る流人の名を記してあるが、總計三千人に近い。尤も中には護送の途中病死したものや、何かの都合で三宅島等へ上陸させられたものなどもあるが、更に角中々の數である。之れ等は流人となつた以上、殆ど赦免される事は無かつたのであるから島内流人の數は常に三四百に及んだのである。

流人に關する觸書等はいろいろあるが、最近圖らずも入手した一寫本に、流人の江戸からの護送の様を簡單ながら記載したものがあつたから之を抄録する。書名は「島物語」とあつて(天保四年六月三宅島流人御本丸與坊主清傳が密かに江戸へ書送つた「島日記」とは違ふ)

本文には「八丈島に四年程居候……喜三郎と申者……當國へ逃去其人の書認め候なり、其仁今以傳馬町牢内に罷居候なり筆墨不自由の所に候へば如斯に書筆仕候以上 天保十二年十一月十日」

とある。記憶に依て書いたものらしく又公儀の思惑もあつたであらうから、省筆した處もあるらしい。

「御用船様子の事。船は五百石積餘の船にて船櫓前にて船竿作り長さ三間横巾六尺高さ四尺右船竿の内三尺四方の詰有。船頭水主の者八人乗也。遠嶋出帆の節は永代橋萬年橋美嚴島此所にて諸親類一家一門身寄の者暇乞ひに來り夫々の見舞物見舞もの色々申受是より御用船は順風に任せ出船に越き。此所御船手御役所より引船にて引出し其時諸親類隨人の者共、老若男女に不限一生の別れゆへ、何れも泪ながら無是非相分れ、御用船へは流人等固の役人御船手御役所より一艘に三人つゝ新島迄行。八丈島行流人は江戸表春船にて出帆いたし候者は三宅島に待船を致し後御用船にて参り候。出船は順風次第出帆致八丈島へ着致候へば此島の濱邊には地役人名主組頭書役流人頭小前の百姓流人共不殘罷出待居候。流人のもの共船上りいたし此濱邊にて先例の通地役人の下知にて村々百姓五人組と申組合へ國引にて被引取申候。引取相濟候へば流人は夫々の荷物持参にて銘々五人組の宅へ参り夫より三日の間休み致休足相濟候へば組頭同道にて御陣屋へ参り役方の御作法を承り銘々の名前爪印を致し罷歸り從是組頭の差圖を以て當人勝手次第の渡世いたす。渡世なりがたきものは無撰村方の内貰ひ人等いたして露命をつなぐなり。」

二、近藤富藏

流人には各種の階級の人が含まれてゐたのであらうが、元來流罪人は大島三宅島八丈島の三島に流され、八丈島へ流される者は重罪のものである。即ち悪逆無

道のものであるが、中には國事犯的のものも少なく  
なかつた、甲に屬するものは島送りとなつてから一念  
發起するものが多かつたらしく所謂惡に強いものは又  
善にも強いと云ふ譯であらう。乙に屬するものは惡人  
と云つても普通の強惡とは異なるのであるから、島では

始めから特別待遇を受けてゐたし、又内地の親類や知  
己から時々届け物もあり、相當な生活をしてゐたも  
のである。且又此れ等の者は學問もあり素養もあつた  
ので、島人に文字を教へたり、各種産業の開發を導い  
たりしたものである。島に於ける各種の産業發の展は

全く流入の力に由ると云つても過言ではあるまい。酒  
を作り醬油を作り味噌を作り椀油を取る事や、農作漁  
業の方法に至るまで、各國の方法が傳はつて居て、自  
ら其粹を集める事になり、引いては島全體を向上せし  
めたのである。此の種の流入は島民も之を尊敬し或は

邸宅を興へ子女を侍らせながら客人或はそれ以上の  
取扱ひをしたものである。此の如く流入對島民の關係  
は中々面白く且微妙なるものがあつたのである。現在  
の島民の内には之れ等流入の子孫も相當ある譯で、中  
には其事を誇りとするものさへあると云はれて居る。

流入の内でも最も島人に尊敬され、其墓も大切に保存  
され尙明らかに其子孫が居るものは近藤富藏であらう  
富藏は徳川末期蝦夷を踏破し露國との境界を分らかに  
した近藤重藏守重の子である。其理由としては諸説あ  
つて何れが眞か確め難いが近藤春夫著「小笠原及八丈  
島記」の記す處を抄録すると次の通りである。

『父の重藏が瀧野川で甲冑姿の石像を作つた爲め幕  
府の忌諱に觸れて目黒の別荘に移つた。然るに彼れ  
に土地を賣つた三田村半之助と呼ぶ地主と種々の軋  
轢があつて半之助は無頼の徒をして狼藉を働かせた

是に於て重藏の長男富藏は十九歳の少年であつたが  
英傑の血が流れて居る彼は忽ち腰の一刀を抜いて彼

等を追散らし逃げる半之助を斬つて捨て、更に其家  
に闖入して家族四人を殺した。時は文政九年であつ  
た。此事幕府の知る所となつて重藏は家事不取締の  
罪で江州大藩藩主分部若狭守に御預けとなり、富藏  
は八丈島に遠島となつた。』

『富藏は六尺豊かの大男で年こそ若けれ、頗る器用  
な爲め色々な事を島民に教へた。夫れが爲め島民の  
彼を尊敬すること甚しく一時は殆ど島の支配者みた  
いな地位にあつた。彼は人を殺したから動物は決して  
自ら殺さない』と云ひ風の如きも何百何千となく自  
分にたかつて居ても之を殺さぬ。常に襪襪を纏つて

居たが、虱が餘り多くなるとそれを振り落すのを常  
とした。又子供が蜻蛉を持つて居るとそれをお呉れ  
と云つて半紙や何かと取り換へてやり其蜻蛉を逃が  
すのを常とした、子供の方では何か貰へる所から面  
白半分に幾度も／＼持つてゆく始末だつた』

『海島民俗誌』には近藤富藏の後日譚を次の如く書  
いて居る。  
『富藏は、文政十年四月八丈に流され、後、浮田中  
納言の第二子小平次殿の後裔といふ一女を嫁り、子孫  
を八丈に残した。明治十三年赦免されて單身一旦歸京  
し當時大阪に判事をしてゐた實弟を訪ね行き、歸りの  
旅費として百圓貰つたが、途々乞食に逢ふ毎に五十錢  
一圓と施してやつてゐるのを胡麻の蠅に見つけられ殘  
金そつくり奪はれて、長い東海道の道中を食ふや食は  
ずで野宿しなから東京に着いた、さうして八十近い老  
體を自ら再び島に運んで明治二十年八十三歳にして島  
の土となつた、彼の墓も八丈三根村にある。』

富藏は「八丈實記」六十餘卷を著して島の歴史を大  
成した。

### 三、爲朝傳説

爲朝は傳説的人物としては銘々たるものであつて  
各地に種々の傳説を残して居るが、ことに南方の諸島  
には多い。大島へ流された事は史實に徴して先づ眞實  
であらうが、其後或は沖繩へ渡り或は八丈其他の島々  
へ渡つたと云ふのは、どこまでが事實か、否か疑はし  
るを得ないが、英雄を崇拜し、自分等の祖先を豪傑た  
らしめたい島民は、其眞偽の批評を、全くの問題外に  
置き無條件に故蹟や物語を承認するのである。(柳田  
國男著「傳説」には爲朝傳説の條がある、参照されたい)  
八丈島に於ける爲朝の故蹟と稱するものは、現在  
甚多いが其二三を「八丈島仙郷誌」から抄録する。

『大賀郷村大里に淨土宗飯峰山天松院宗福寺がある  
其の縁起は次の通りである。爲朝が大島に配流され  
てから三宅島に渡り更に八丈島に渡つた。其の當時  
本島は全嶋住民は婦女子のみにして言語不通恐怖の  
あまり其處此處と隠れ廻つて爲朝に近寄り言葉を交  
すものは一人もなかつたと云ふことである。然るに  
其内に容姿端麗直なる一婦人があつた。其の名を

七郎三郎長女と云つて居つた。其後爲朝との間に男  
子の双兒を分産した。この二兒を太郎丸次郎丸と名  
附け二人の間に撫育されて居つた。其後次郎丸成長  
して次郎爲宗と名乗り八丈嶋嶋主となつたのである  
爲宗は香爐山彌陀寺を西山の麓に創建して父母の冥  
福を祈り自身該寺に住み住職となつたのである。其  
後爲宗の子孫相繼ぎ住職となり遂に此處を入道宮と  
稱して居た。其後寺を大里に移し寺號を改めた。』

大里の郷社前から榎立村に前進すること約五町にし  
て右方高臺がある、之の西方は爲朝の舊城跡で現今其  
の外城が残つてゐるのみである。島道の右側道路に接  
して爲朝石がある。之れは爲朝が八丈嶋にて鬼退治を  
行ひ十數尺立方の巨石を以て鬼を生埋として之れを覆

此の石が人が爪にて抵き削り桃の實大迄に磨滅したならば鬼を助けてやると言つたと云ふ。口碑が遺つてゐる。爲朝石に沿ひ右方の坂路を舊道に沿ひ行くこと約五六十間にして爲朝の腰掛石がある。之れは爲朝の腰掛けたと云ふ石で高さ一尺餘椅子に似たものである。此處から南方を仰望すれば大坂峯の絶壁があつて、右方斷崖に凹地がある。之れは爲朝が弓を以て射通したと云ふ所。其の箭が榎立村道路の箭立土に落ちたと云ふ。

三根村から根田原へ行くとその中央小丘に辨天の祠がある、此の附近ノーツー瀑布がある。傳説によるとにノーツー瀧の河下現在の根田原は元は沼地で多數の池沼があつた、而して大池から毎夜大蛇が女に化け娘兒や小牛など浚ひ多數の島民を困憊せしめたので爲朝は其の大蛇を退治し之を八裂にしたと云ふことである。而して該大蛇は全長約八丈あつたと云ふ。八丈島の名はこれから淵源したと云ふことである。大蛇を退治した跡は「赤み澤」と云つてゐる。赤切山の麓の「サカウが横原」には洞穴の清水がある。これは爲朝弓を射てつきあてその穴から清水が出たとの事である。

八丈嶋西南約〇哩に小島がある、周圍〇里餘、其の字嶋木村には爲朝神社がある。爲朝八丈島から更にこゝに渡り自滅したが、嶋人慕ひ崇め奉り嶋の鎮守としたと云はれて居る。

此れ等の傳説的古蹟は古く太田南畝の南畝夢言や伴信友の中外經緯傳に書かれて居る爲朝の記事と對照して、島民の爲朝に對する信仰的崇拜の古くから、いかにばかり深く且大であつたかを物語つて居る。

#### 四、倉庫及家屋

八丈島の倉庫は獨特のもので、各家宅地の一角に母

家よりも堅牢なものが立つて居る。八丈島は風害もさる事ながら鼠害と濕害があるので、床は思ひ切り高くし、脚木より床板を外へ出して居る。「伊豆島巡視日録」に其構造の詳細が出て居る「また倉といふあり、是も屋根は茅葺の寶形つくりにて、ゆかの高さこと數丈、腰を屈れば人立ちながら床の下へ入ることを得べく、俗に中二階といふものに類す、柱は四隅のみを存し床の下なるところに柱へ木もて別に一枚を横へたること宛も刀劍のセツ、バを挿みたるに似たり。床板はセ

### 統制と創意

角田 好太郎

現今全體主義統制主義が強張せられ個人主義自由主義が排斥せられて居る。個人を排して全體を探り、自由を排して統制を主張する時に、其れが私益に公益を優先せしめ、個人よりも國家社會を上位に置くこと謂ふ理念の表現であるとすれば、全體主義であり統制主義でなければならぬ。公より私を先にし全體よりも個體を重んずる場合には、社會生活若くは團體生活は一日も維持せられ得ないことは時と所とを問はず何人も争はない事實であらう。

然し全體主義を強張し、統制主義を尊重することの餘り個人的創意の自由を完全に彈壓することは自由主義を強張して絶對的なる自由を許すことと同様に國家社會を進歩發達せしめる爲の原則たり得るものではない。統制なき所に人の自由が存し得ないことは謂ふを俟たないが同様に自由なき所に統制は在り得ないのである。

人が自由に馴れて各自の存在が國家社會全體の存在に繋ることを忘れ、私益に没頭して全體の存在を輕ん

ずることが團體の結合を弱め國家社會を破滅に導くことは謂ふを俟たない所であるが同様に全體生活に不必要なる強制を行ひ、各人の個人的創意を極端に彈壓することが必ずしも健全なる國家生活を招來する所以のものではない。

此の問題に關聯して現在一部に於ては發明權及び特許權の公用徵收を強張する見解がある。公用徵收の制度は全體的見地から益々尊重せられ發達せられなければならない。然し元來公用徵收は全體的な要求と個人的要求とを調和する主旨のものである、其れが如何なる場合に行はれ如何なる條件の下に行はるべきかについては、右に謂ふ統制と自由との適當なる限界を實現する内容のものでなければならぬ、收用の條件乃至方法が全體的の必要を超へて濫刺たる個人的創意を萎縮せしむることは發明權及び特許權の公用徵收に於て特に注意せらるべきである。蓋し個人的創意を離れては如何なる發明も存在し得ないからである。

時局柄、發明權、特許權其他工業所有權に對する公用徵收制度の發達は固より必要であり希望する所であるが、全體的統制と個人的利益との適當なる調整を實現した内容のものであることを切望する。

ツバの上より外へ二尺ばかり張り出し、倉の四方は板もで圍み、たゞ一面に戸を閉閉すべくなし、物を出入する毎に階子をかけて入り、出れば輒ち階子を撤す、これ鼠を防ぐが爲の構造なるよし。

八丈島の田舎ではこの倉庫が母家の正面に建てられて居て、往來からもよく見える。

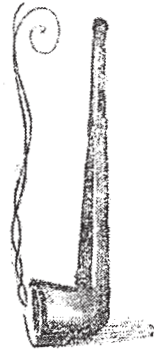
母家の構造も「伊豆巡視日録」の記事を引用する。「此宿の家つくりのさまを見るに茅葺の寶形つくりの屋根にて簷先低くたれ、室の一面を明けて椽をとり

ゆかは甚だ高し、床の間に並びて佛壇を設け、壁はみな板張にて席は所謂障後表を用ひたり。簾の低きは風の烈しきにより、床の高きは濕氣深きによるとぞ。勝手のかたはたゞみを用ひず。例のまぐさむしろを敷きたるのみにて下男下女等は其上に坐臥す」

右目錄は明治二十年竹中邦香の著したものであるから、現今とは多少の相違もあるが、床の高い事、屋根の勾配の急な事は變らない、大島のより更に高く又急である。

高い整つた石垣。蘇鐵、椿、等の亜熱帯の植木林。其の間に散點する之れ等の家や倉庫。其處へ顯れる島

評書



典籍散語

來島志朗

(一) Rogge, H.: Nationale Friedenspolitik;

Handbuch des Friedensproblems und seiner wissenschaft auf der grundlage systematischer Völkerrechtspolitik. Berlin, 1938.

伯林大學に於て政治學講座を擔任する著者は又同時にその獨特の安全保障理論を以て現にナチス獨逸の持つ最も勝れたる國際法理論家の一人であると言はれる彼は今「平和學」と名付くる極めて野心的なテーマを拉し來つて本書を通じ其試験的體系を確立しようとするのである。

著者は先づ平和學確立への總論的敘述後、獨、英、米、佛の豊富なる資料を驅使し、明確なる組織の下に法

女は頭上に荷を乗せたり、或は前額に紐をかけて荷を背負つたりしてゐる。天はあくまで青く、海は限りなく碧い。此の景観を見るだけでも其處に別世界の妙趣を味ふことが出来る。更に産業、經濟方面の近代發展の跡を調査すれば、島特殊の狀況を知つて愈々益々歸家を忘れるに至る。諸賢の御一航を御す、めする次第である。

本稿尙八丈絹、水産物さては珍草奇木などについても書こうと思つたが紙数の關係から之れ等は他日に譲る事とする。(筆者は、本學教授)

に依つて如何に平和を樹立するかの國際法學の根本問題に觸れ、此理論的基礎をコーラーの法律哲學教科書に求め、自衛權、財産保護、法的調停等を承認する法的平和機構の基本的範疇をこれに依つて見出さうと企て、此等の實證的諸概念をばその平和機構上の影響の裡に検討してゐる。これと同時に著者はカントの所謂公明平和條約理論に基き、永久平和の確立に關聯する名譽と信實の範疇を考察した。

我々は二十世紀國際法學に課せられた運命的問題とさく思はれる國際法政策學の分野に投ぜられた此價値多き業績が平和學に一のコオナア・ストーンを置き得たとすれば、其勢を著者に謝すのみならず、學界の一大收穫として心からの感謝を捧げねばならないであらう。尙本書にはストレーゼマン記念財團、アブラハム・リンカン財團、獨逸學豫備財團等の補助が與へられ著者は此書をヨゼフ・コオラアに捧げてゐる。

(二) Crossman, R.H.S.: Government and Governed;

-A History of Political Ideas and Political

practice. London, 1939.

Plato today の著者として知られてゐるクロオスマンは、此新著に於て中世政治組織を簡單に検討したる後、主要なる歐洲的政治理念を其生成と發展過程を常に顧慮しつつ、摘出しようとする。事實ホツパスからヒットラーに至る政治組織を概観することを企圖した本書ではあるが、彼の經驗と學識はよくこれを整備して此書の題目に適合せしめてゐる。

著者はマキアベリイ、ロック、ルソオ及び英國に於ける功利主義者達を彼等の時代の社會的政治的狀勢下に捕捉検討し、他面佛蘭西憲法及び亞米利加のそのの精神を汲み、更に最近に至つては露西亞、伊太利、獨逸に於ける全體主義の原則に迄及んでゐる。

然も此等の敘述は、著者の生活と機智とユウモアに満たされてゐる。我々は此書を單なる政治學書としてのみならず、好個の教養の書として讀むことが出来る

(三) 林 悟堂 著 支那のユウモア 岩波新書

所謂良識の哲學者林悟堂は支那の持つ優れたる社會評論家として既に汎く認められてゐるが、彼は本書に於ても國際人として極めてリイズナブルな立場に於て世界と世界人に話しかけてゐる。本書の内容を成すものは極く身近な身邊の實感であり、理窟ではないが、そこに彼獨特の真識に諷刺やユウモアの藥味を振りかけ胃袋の弱い人々にもなるべく公平に頌たうとする著者の意圖がよく現れてゐる。

本書に收められてゐる「如何に支那人を理解すべきか」以下二十三篇はかつて彼が一九三〇年六月以降チヤイナア・クリテイツク誌上に「小評論」と題して連載したエッセイ及び講演からの抜萃である。

譯者は大阪朝日新聞の中堅記者である。定價〇、五〇



# 學内報

## 興亞奉公日遙拜式舉行

十月一日午前八時半より大六學舎講堂に於て、興亞奉公日遙拜式を舉行し護國の英靈に敬虔なる感謝の黙禱を捧げ東亞興隆の信念を一層固くした。

## 防空演習參加

十月一日より行はれる「實戰即應」の防空演習には本學に於ても欣然之に參加

# 校友會報

## 會誌と講演

母校の發展に寄與すると云ふ事が校友會本來の使命であるが、茲兩三年に至り校友會は漸くその活動の時期に入り校友各位の母校を愛する熱意と温かき同情は澎湃として湧き上らんとしてゐる。この機會に於て校友の總意を表明し、意見の統一を圖り、校友會の進むべき道を明にするものとしての校友會誌は注目すべく目下編輯中であり今月末には發刊を見ることになつてをり、前號發表の月例講演會は委員に藤川太郎、春原源太郎、松原藤由の三氏を擧げ近く第一回講演會の開催を具體化し校友會事業遂行の第一歩を踏み出す事となつた。

その期間專門部二部の授業が行はれた事として、相當困難であつたが、警備方法は積極的に計畫され、正井專門部長を本部長に防護團を結成、學生職員協力してその萬全が期せられ結果も良好の成績であつた。

## 軍人援護に關する勅語奉讀式

聖戰に參加する皇國の軍人に垂れさせ給へる大御心を奉戴、心中に銘すべく軍人援護に關する勅語奉讀式は左の通り舉行された。

## 天狗に指南

### 大連支部

秀麗會第五十二回例會を去る八月二十日海務協會に開催した。今日は濱島三殿が諸天狗を相手に教授？大連棋院秀麗會に移轉の形も、萬障繰合せて一堂に集つた校友は心から嬉しうだ、丁度一ヶ月振りの談話會である。こゝでは絶対に沈黙は許されない、各自が抱く意見を吐露して熱をあげる、今日の話題はどうしても「金本位制」と「關稅問題」が中心の線だつた。

- 出席者——高濱直一、木村儀一、守谷賢治、川野勳平、秀島全治、濱島久義、早川源四郎、北條茂義、萩原博、寺田英治郎、平井三朗、竹若隆三、

○武笠幹雄君壯行會 大連支部秀麗會

行された。

十月三日

- 學部及豫科(正午) 豫科講堂、專門部一部(午前八時半)、同二部(午後六時) 大六學舎講堂

## 講師囑任

曩に逝去された和田信大講師の後任として新に大毎エコノミスト編輯次長岩井良太郎氏が委嘱せられ、十月四日より學部政治學科、經濟學科、商業科各三年の「外國經濟事情」講座を擔當せらる。

## 應召復學者

### 追試験卒業業者

專門部應召復學者生徒に對する臨時卒業試験は去る六月施行の上文部省に對し認可申請中の處、七月十五日付を以て認可せられたる者左の通である。

- 專門部第一部法律學科草加良人 大阪  
同商業學科大原英治良 福岡  
專門部第二部經濟學科岡村武雄 大阪  
山上敬一(奈良)、同商業學科熊野正(廣島)

## 張切つて居ます

### 蒙疆方面の校友

防共の第一線、蒙疆の地にあつて奮闘せられてゐる校友諸氏に交つて新に本年卒業の伊室、寺部、高橋、加地、西本、壽福、山田、植山の諸氏が蒙疆學院生として彼地に赴かれその第一回記念撮影の一片が先日届けられました。諸氏の元氣な顔をお目に掛けませう。

## 五線會

十年一と昔と云ふ！

昭和五年學部卒業生より成る五線會は秋冷の九月二十六日午後五時半より土佐堀

(因に蒙疆學院とは蒙疆政府の官吏養成

所とも云ふべき所で、此處で一定の指導を受けた後々々の地位に配置されます。

### 大阪府警察部の異動

最近の異動の中本學關係者

成紀七三五年六月三十日撮影、於張家口、萬福春  
◇前列向て右より◇櫻木一雄(政府總務部總動員科)和佐藏之助、中島萬藏(以上政府參議府)井山萬藏(加藤商店支店長)久米(政府民政部)◇後列向て右より◇植山、山田、壽福、西本、加地、高橋、寺部、伊室(以上本年度卒業者警監學院生)



△下出一雄(大八專法) 福島署長より船場署長△原仙吉(大十一專法) 天王寺署長より天満署長 △古川龜雄(大十一專法) 玉造署長より九條署長(以上警視)  
△吉井榮治(昭十專法) 任警視、特高課勞働係より港水上署長  
△中谷五一(大十專法) 福島署より古市署長△織田佐代治(大十四大法) 監察課より大和田署長△北田康民(大十四專法) 地黃署長より監察課△德竹要(大十五大法)

富田林署長より刑事課庶務係長  
△富田實左右(大十五大法) 外事課より警察練習所△天宅俊治(大十五大法) 特高課檢閱係長より同課思想係長△山本稀一(大十五專法) 交通課事業係長より豐中署長△大野矩雄(昭二大法) 特高課内鮮係より經濟保安情報係長△上村靜馬(昭二大法) 尼崎署長より刑事課治安係長△中島平吉(昭二大經) 茨木署長より經濟保安檢舉係長△宮元民之助(昭三專法) 豐中署長より保安課風紀係長△菊池一男(昭七專法) 警察練習所より特高課(以上警部)

島博(昭六專法) 交通課より川口署△山川兵一(昭六專法) 今宮署より鶴橋署(以上任警部)  
△松本市大郎(昭二專經) 阿部野署より川口署△野田平三(昭四專英) 十三橋署より港水上署(以上警部補)  
一法師安喜(大九專法) 九條署警部△野崎正雄(昭三大法) 川口署警部補(以上依願退職)  
△中村貞次郎(昭八專二政) 島之内署より枚方署△島橋良一(昭九大法) 今福署より特高課△古川親(昭五大法) 經濟保安課より外事課△村上光則(昭九專二法) 阿部野署より十三橋署△森山輝(昭六專法) 警務課より交通課△龜谷富藏(昭十專二法) 警務課より鶴橋署△藤田肇(昭二專法) 船場署より天満署△藤野春三(昭七大經) 住吉署より九條署△福原克巳(昭七大法) 今宮署より八尾署△矢野芳雄(昭十三大法) 天王寺署より今宮署△丸野智(昭九大法) 川口署より朝日橋署△生野義忠(昭十三大法) 泉尾署より會根崎署(以上警部補)  
△高木忠之(昭十二專二法) 警務課より會根崎署△橋高忠雄(昭十專二法) 外事課より網島署△講本政次郎(昭十二專二法) 刑事課より田邊署(以上任警部補)

### 會員消息

荒川彌一郎(昭十五大法) 奉天秋町七、厚生會館二號室へ移轉  
飯田 種次(大十三專商) 市岡商業より九條第二商業青年學校教諭に轉動

池本彌太郎(昭二大法) 西淀川區御幣島井上鐵工所に入社  
伊場 信一(昭三專商) 厚生省軍事保護院より大阪府地方課兼勞働課長に轉任  
石井 武雄(昭三專商) 岩國市海士路二三八、東洋紡績會社岩國工場に轉勤  
池田 菊重(昭八專三經) 大阪府奉職、岸和田財務出張所在勤  
浦崎 政雄(昭七專經) 新西廣市場、滿洲炭礦坑木會社に勤務  
内田 堅(昭十三專一商) 滿洲生活必需品會社創立當初より社業に執筆、現在新京支店在勤  
岡本 進(昭四專法) 藤倉化學工業會社に轉勤、住所東京市中野區野方町二ノ一四五三  
大島 謙吉(昭九大法) 大毎運動部記者、日獨陸上競技對抗試合に渡歐中、歐洲大戦勃發に逢ひ、同社獨逸特派員を命ぜられ、目下ベルリンに在りて活躍されてゐる  
緒方 重之(昭十專二法) 召集解除となり朝鮮忠清南道洪城郡廳に勤務  
川野 勤平(昭三專經) 大連市桔梗町一二一(轉居)

金原 正雄(昭四專法) 平安南道產業部第二課に勤務  
木村 基(昭十大法) 兵庫縣武庫郡御影町西平野字平野二二に轉居  
窪島 龍夫(昭三專商) 岡島製作所に勤務  
住所は豊中市内田三〇九

黒川 義美(昭十專二商) 愛知縣半田市字  
堀崎一ノ二に轉居  
小橋 勝(昭八專國) 奈良縣南葛城郡御  
所町三一九現住

島田市太郎(大十四專商) 矢野テント商會  
入社、住所中河内郡八尾町山本三七三  
志賀 潔(昭十一專二法) 愛媛縣新居郡  
神戶村巡査駐在所に轉任

杉本 巖(昭八專一經) 尼崎市杭瀬大崩  
一六現在  
杉原 芳孝(昭十一專二法) 北支開發東京  
本社に轉勤、住所小石川區厚町三一

關田 岩喜(昭四專法) 高知縣幡多郡中村  
町、土佐貯蓄銀行中村支店に轉勤  
關矢 一雄(昭九專二法) 大日本紡績聯合  
會在勤

清野 靜一(昭十專二法) 健康保健醫報社  
主事を辭し、東京府醫師會保健課長に  
就任  
高垣 武男(昭十四專二法) 吹田市片山一  
〇一、清水方に移轉

竹内美太郎(昭十五專二商) 日本生命を退  
社、日本アルミ製造所會計部に入社  
寺 尾 愈(昭十四專一法) 召集解除と  
なり、日本發送電大阪支店庶務課人事  
係勤務、豐能郡箕面村櫻丘、發送電寮  
止宿

戸伏 正孝(昭九專一商) 召集解除となり  
九州電氣軌道會社勤務  
戸田 正親(昭十五專二法) 愛媛縣廳總務  
部地方課奉職、松山市湯之町南町六五  
四、相原方止宿

徳毛 俊雄(昭十五專二商) 東京市大森區  
山王二ノ一八四〇に轉居  
中道 正雄(昭三專文) 大毎特派員として  
中、南支に六ヶ月餘從軍し、過般大阪  
本社布施通信部に歸社

中島樹一郎(昭六專商) 南區長堀橋日立館  
内、同和自動車會社勤務、住所は住吉  
區阪南町中二ノ四四  
中野 英一(昭八大法) 滿洲國間島省公署  
より同省江清縣公署主計股長に轉任

中村 忠夫(昭九專一商) 北區中之島二、  
佐野紡績會社轉勤  
長瀬 玄亮(昭十四大法) 東京市中野區本  
町通六ノ八、東條方に轉居

中村光太郎(昭十四大法) 滿洲國大同學院  
を卒業し吉林省長官房庶務科企畫院股  
勤務  
中山津治郎(昭十四專一商) トヨタ自動車  
工業會社在勤、住所は名古屋市中種區  
田代町、田代莊内

西尾 勝美(昭五大法) 布施市中小阪六六  
九に轉居  
西口權四郎(昭六大法) 八戶區裁判所より  
秋田地方裁判所判事に轉任、住所は秋  
田市手形堀度町三

西田 竹雄(昭六大法) 大毎上海支局より  
北京支局北京西城定埠大街に轉勤  
西木 啓兒(昭八大商) 三井物産會社より  
三泰産業會社通達支店(興安南省)に  
轉勤

西山 逸郎(昭九專二商) 兵庫縣川邊郡岡  
田村上阪部野畑、合成機脂工業所内に  
轉勤

轉勤  
根津菊治郎(大十五專商) 大朝九州本社よ  
り福岡支局長に轉任、自宅は福岡市島  
飼本町一ノ一八

野田 靖正(昭三專法) 鹿児島縣川邊郡枕  
崎町十五銀行出張所に轉勤  
野口 茂樹(昭四大法) 長府郵便局長就任  
野口 卯吉(昭九專二商) 滿洲國豐寧縣公  
署より熱河省官房地方科に轉勤

橋岡熊四郎(大十一專法) 大阪市三先小學  
校長より九條第二小學校兼市岡第二商  
業青年學校長に轉任  
橋本 利八(大十四專法) 大藏省主稅局よ  
り鹿児島關長に轉任

長谷川義男(昭十二專二法) 兵庫縣廳總務  
部議事課勤務、住所は明石郡垂水町東

垂水四五七ノ一〇  
服部龜代重(昭十四專二商) 西部三十六聯  
隊入營  
平田奈良太郎(大十一專法) 大阪區裁判所  
檢事局次席より大阪控訴院檢事に轉任

久井 忠雄(昭六大法) 警視廳警衛課長よ  
り福岡縣警察部特高課長に轉勤  
平林 武雄(昭八大法) 京都市伏見區深草  
下川原町四六に轉居

土持 勇三(昭十四專二法) 神戸市林田區  
宮川町四ノ一九現住  
藤井藤三郎(昭十專二法) 東區内平野町一ノ  
二八にて辨理士開業

福田 一郎(昭三天經) 此花區西島町三六  
五、大阪瓦斯會社西島工場社宅に轉居  
福田 徳治(昭十二專二商) 墨江小學校よ

### 學生彙報

#### 本年度征覇成る

注目される野球部

關西六大學野球リーグに今春四シーズ  
ンぶりで優勝、往年の意氣を示すと共に  
今後への飛躍を約束した本學野球部は、  
今秋リーグに於て去る九月十四日神戸商  
大を5對4にて撃破したので手初めに次  
々と強豪を鎧袖一纏に斃し、二十九日に  
は共に優勝候補と目された同志社大學を  
2對0にて敗走せしめ優勝確實にこぎつ  
け、本月十三日對立命館に於て大勝又も  
一筆に償しやう。

や今秋の覇者となつた。尙本リーグは關  
東と呼應して一本勝負を初めた最初の事  
として相當の苦心もあつたのである。  
本リーグの成績を示せば左の如くであ  
る。

(九月十四日) 本學5—4 神南大(同  
二十一日) 本學5—3 京大(同二十三  
日) 本學2—0 關學(同二十九日) 本  
學4—2 同大

尙各選手の打撃も相當に長く寺富、谷、  
佐野、萩、藤澤等十分の腕をふるつた、  
その他休暇中東京へ遠征して慶應を敗  
り今後同方面に對する自信を強くした事

り市岡第二商業教諭に轉任  
細田 三郎(昭三)北鮮合同電氣會社を  
辭し清津府初瀬町一〇七にて木曜電氣  
商會を經營  
松村榮治郎(昭九)西宮市大畑町六三  
に移轉

町 要三(昭十二)神戸市外御影町  
上中六七四ノ二に轉居  
松本 貫一(昭十二)東京市麴町區  
九段、軍人會館に勤務  
峯浦 重起(昭十四)大塚、大塚特派員とし  
て北支に活躍されてゐたが過般同社  
西部總局佐賀支局長に就任

三浦 忠義(昭九)日本生命本社勤  
務、兵庫縣川邊郡塚口日生塚口寮止宿  
村上 達(昭十五)濱田區裁判所  
より廣島地方裁判所吳支部豫審判事に  
轉任、住所は吳市古川町三ノ二

名刺 淺次(昭三)新京大同大街、講  
洲電氣會社に入社、放送部事業課勤務  
森内 純吾(昭七)奉天市大和區義光  
街三段四三號に轉居

森田 彦一(昭十)復州炭礦より田師  
付炭礦(奉天省本溪縣田師付)に轉勤  
天寺 三郎(昭六)大阪中央放送局より  
同奈良出張所に轉勤、住所は奈良市高  
畑砂石六六六

山田 清太郎(昭四)本誌前々號に警部  
補に任じとあるは警部に任じの誤にて  
大阪府警察部警務課兼工場課に勤務  
山本 實(昭八)召集解除となり  
兵庫縣赤穂郡相生町、播磨造船所勤務

山田 省三(昭十二)大阪鐵工所工  
場課在勤、旭區上辻町七九に轉居  
山田 春治(昭十四)兵庫縣警察部  
警務課勤務

吉田 平治郎(昭四)京城地方院長を  
辭し、廣島市翠町一六二〇現住  
吉岡 嵩(昭十三)第十四聯隊より

退營、廣島縣廳に勤務  
吉田 敬三(昭十五)大阪鐵工所因  
島工場勤務、廣島縣三庄町平木、平木  
寮止宿  
渡邊 政幸(昭六)住吉區桑津町五二  
二に轉居

若林 茂(昭十四)中支戦線にて經  
理部幹候生として〇〇部隊村上隊に轉  
隊  
和氣 正之(昭十五)日本特免織織  
物元配給會社を辭し、武田長兵衛商店  
本工場統制課に轉勤

昭四 專法 金 正 煥 金原 正雄  
昭三 專商 國米 龍夫 窪島 龍夫  
昭十二 專二法 中安 正弘 吉田 正弘  
昭八 專國 芳村 勝 小橋 勝

嶺本新太郎君(昭五)奈良市會議長、  
辯護士として、市政並に法曹界に盡力  
さるゝ處多かつたが、去る七月二十六  
日逝去さる、享年六十三  
佐武 太助君(昭七)大阪市役所用地課  
に勤務されてゐたが去る九月二十二日  
逝去

藥師寺二郎君(昭十三)昭和十三年十  
二月應召以來大陸の戦野に奮戦され、  
去月中支湖北省孝感附近の戦團にて名  
譽の戦死を遂げらる  
遺族、東區北濱一ノ三、父藥師寺一氏  
水野 準二君(昭十四)應召出征中  
去月壯烈なる名譽の戦死を遂げらる  
馬場 文彦君(昭十四)本年三月出征  
の處、七月十一日湖北省にて名譽の戦  
病死を遂げらる

改姓名

(舊姓名) (新姓名)  
昭四 專法 金 正 煥 金原 正雄  
昭三 專商 國米 龍夫 窪島 龍夫  
昭十二 專二法 中安 正弘 吉田 正弘  
昭八 專國 芳村 勝 小橋 勝

訃音

嶺本新太郎君(昭五)奈良市會議長、  
辯護士として、市政並に法曹界に盡力  
さるゝ處多かつたが、去る七月二十六  
日逝去さる、享年六十三  
佐武 太助君(昭七)大阪市役所用地課  
に勤務されてゐたが去る九月二十二日  
逝去

對明大戰に三年連覇成る

フエンシング部

關東春季リーグの覇者明大との第三回  
定期戦は、九月四日大阪V.M.C.A.體育館  
に於て舉行されたが、八尾主將以下山口  
副將、谷本専門部主將、溝淵、木村、本  
江、松山の本學劍士團は闘志満々、老功  
明治大學を全種目に於て撃破し、待望の  
三年連覇を成し遂げた。戦績を擧ぐれば  
大槪左の如し、

◇フルレ戦 本學8—6明大  
明大のイタリヤ式に對するに本學のその  
弱點を突いてフレンチ式を採用、又フレ  
ツシユメン木村、本江、松山の闘志等そ  
の勝因と思はれる

◇エツベ戦 本學13—5明大  
昨年度の惨敗を挽回、八尾、山口のブ  
ツク銳し

◇サブブル戦 本學10—8明大  
敗戦を豫想された本種目も熱と意氣で見  
事感應成る

東の覇者明大を撃破

千里山馬術部

第四回對明大定期戦は九月十四日午後  
一時より阪神中津の濱甲子園乗馬クラブ  
に於て舉行、野外騎乗、障礙飛越の二種  
目とし本學より安藤、齋藤、岡村、森、  
加藤のベスト・メンバー出場、平常の實  
力を遺憾なく發揮、妙技繰出して本年度  
關東馬術爭覇者明大を完全に壓倒、名實

共に全日本學生馬術の王座を占むるに至  
つた。當日の成績は左の如くであるが尚  
今日迄の處二勝二敗の同率である。

(全徑一、〇〇〇米、障礙十一  
所要基準時間五分、減點法)

關大	馬名	473	明大	568
○岡村	若勇	5	○南柳	11
○安藤	フライヤ	415	○井崎	465
○加藤	雲棟	0	○鈴木	0
○齋藤	輝花	30	○坂本	92
○森	大山	23	○坂本	0

高文司法科

筆記試験合格者

年々その數を増大して行く本學高文合  
格者は昨年その比率に於て全國第二位、  
總數に於ては全國第四位關西では京大に  
次ぐものとして天下に萬丈の氣をはいた  
が、本年に至つても最近發表された司法  
科筆記試験合格者中本學關係者は二十一  
名でその氏名は次の通りである。

大田正夫、小野武一、前田重利、以上  
學部卒、伊藤増一、井上一郎、桂川  
史、吉田朝彦、中西一郎、後藤務、合  
田得太郎、手島計助、淺田久雄、佐藤  
英夫、中道武次、白石晴祺(以上專二  
卒藤田登一、棚野誠幸(以上在學生

# 俳句部の思ひ出

佐 澤 寛  
(昭十三、専屬)

昭和十年専門部入學と同時に俳句部に入り爾來卒業迄三、とせを部と喜怒哀樂を共にした思ひ出が今も猶日に新に浮んで仕方がない。

其頃の俳句部は盛んなものであつた。指導者として「京大俳句」の井上日文地氏を戴き、先輩には岸風三樓、淺井塔南、島田格雨氏等の俳壇の新鋭を擁して部員にも後藤、樽本、飯間、宮本、宇都宮、橋本、和田と何れ劣らぬ一騎當千の顔籠は正に學生俳壇の一角に闊大ありと識者の耳をそばたしむるに十分であつた。

吾部の指導精神は漸く傳統俳句の殻を脱して新興俳句の苦難の道を選んだ。かくして部員の人知れぬ創作への努力が續けられ先輩も師も部員も一丸となつて涙ぐましい精進が行はれた。寫生一點張の態度を改めあらゆる角度より詩としての俳句、文學として恥かしからぬ俳句を……。

句會は長柄園分寺で開催されるのが恒例となつた。あの都心のうす暗い寺で鳩の聲を氣にしたがら番茶に持參の煎餅をつまみながら近代俳句……都會俳句を、機械美を、近代感覺を……咏んだのだから對照の妙に驚かされる。

同じ頃白文地氏を中心の京大句會が毎月ガスピルであつたが、それに宇都宮、橋本、和田等に私も定連であつてよく作りよく議論した、ガスピルは國分寺とまるで逆で如何にも新興俳句のふるさとの様な落着いた氣分に浸れるのであつた。

部の年中行事の中で殊に重要なのが大阪外語の俳句會との交歓句會であつた。

當時外語は朝木奏風氏を指導者として質量共に侮り難い陣容を擁し吾部にとつて實に願つてもない好敵手であつた。我等一年の時は外語側が我等を招待し二年の時は我々が國分寺に邀撃し、更に次年には吾部が外語へ遠征すると言つた風でかゝる學生句會の合同句會は日本廣しと言へどその例がない。我々の誇りとして特筆すべき事に違ひない、外語俳句部の指導精神は傳統的な地味な寫生至上主義か

もしくは古典主義であつた。それにしても其く現代の事象を詠みこなさんと——所謂古壺に新酒を盛らんと——した努力の跡歴然たるものがありこの點學ぶべき幾多のものがあつた。しかし吾部の新興俳句と外語側のそれとは所詮水と油であつた。少くとも主流に於てはそうであつた。そして双方の限りなき論議——それだけで自軍の短を知り彼の長を互に感じ合つたのである。外語の大場君と私は毎回大論戰を繰返すのが例となつて同僚からは「大場、佐澤の一騎打は交歓句會の名物」とされてしまつた。

何しろホト、ギス派の寫生主義を奉ずる大場君と新興の一角を死守せんとした小生とは根から對立せざるを得ないわけである。虚々實々の論争は背後に母校があるから負けれないものである。しかし今にして思へば大場君が一番なつかしい。外語の藤原君も「馬酔木」の句會で顔を合したこと等も手傳つて親しい人であるが彼は學生ながら或る意味で完成した俳人とも言ふべきで外語の至寶、従つて吾部の重鎮宇都宮、橋本、和田等もなか／＼苦戦を免れなかつた。

大學祭が近づくと各部は夫々のプランに活況を呈するのであるが俳句部でも他部に負けるを潔とせず毎年賣店を經營するものが常であつてその意氣込も又素晴らしいものがあつた。

出し物はケーキにコブ茶。同じやるなら部の特色を生かすに若くはないと大變な鼻息で慣れぬ手付で店内に貼るのだと俳句を短冊に書く者もある。店内裝飾はかくて満點。明日が大學祭といふ日は晚くまで幹部の鳩首會議——部員は材料を求めて巷にさまよふ。凡そ俳句とはかけ離れた感情に包まれて晴れの日を待つばかり。

當日となれば恐ろしく早く天六に勢揃して山に向ふ。バケツを下げるもの、釜を負ふ者、大きな一時代の様な一風呂敷包を荷ふ者、さてはかんで、きを運ぶ者、

他から見れば實に異様な部隊である。吾部だけではない、各部とも似たりよつたり、ほ／＼えましくもなる。千里山學舎の朝ぼらけに荷を下して度が一役と手間取る。幾度か失敗しながらとにかく炭火がおこり湯が沸くころ大學のグラウンドはもう式典が始らんとし

てゐる、日は昇る、食券の賣れ行きを心配する間もなく千客萬來で轉手古舞。ケーキの評判もよい。それもその筈新興俳句のその感覺に訴へるに足る逸品ぞらひだもの無理もない。客でも女の子など追加注文が多い。喜ぶのは會計、悲鳴を上げるのが賄方。客は多々益々辨ずといふわけで大歡迎だが調理場(?) だけは見せたくない。それを阻止するのが部員の仕事の一つとなる、これでは實際手不足を聊たねばなるまい。

賣店は何から何まで勿論部員でやる。俄ボーイ、俄コック、俄何々……快活な連中は自からボーイとなり沈黙組

が取り殘されてコックになる。コックも急がしくなればボーイとなる。何かの調子にかんてき、が壊れると勇ましいのが二人半里の道を遠しとせず麓の村まで買ひ出しに行き一時間を要して汗にぬれてかんできをついでくる。殘留組の謝辭をうくる間もあらばこそ彼等は汗をぬぐふやボーイとなりコックとなる。

大學祭の疲れを治してくれるものは箕

面への吟行である。北攝の山河は街に住み慣れた者を靜かに抱擁する、此處へは俳句部も幾度この山をさまよつたことか。何時來ても何等かの新しい感觸なしにすまされぬ山である。

新緑の頃部を擧げて瀧から勝尾寺へ出た日の印象が忘れられない。

晩春初夏の候で藤が咲く頃であつた。櫻は葉ばつかり、それでも瀧までは人波を泳ぐ有様である、箕面は實に人がよく出る、山と水が此處ほど小綺麗にまつてある所は、大阪近郊には一寸求め難い。

愛用のカメラを携へた某君しきりにシャッターを切る。空は曇り、木影は多いし心配なものだ、瀧しぶきを浴びて更に勝尾寺へ。

寺は観光客でごた／＼してゐる、人ごみをさけて木立踏み分け、んげ、咲く處にて休憩する、衆議一決作らないつもりの俳句を作ることになる、雑詠、句數隨意と來た。時にきりの様な雨が降つてきた、句を書くノートのペン字がにじむ、まゝよと十人の部員は動かばこそ、雨中句會である。昔なら風流三味といふ所であらうが、この場合はどうして／＼そんな意味は少しもない、作品はみどりしたるばかりの新感覺の佳什。雨の中で選句して互評をやる葉櫻の楢がざわめくと大粒の霽が頬を傳ふ。「噫無情」と言ひたくなる。

勝尾寺からの歸途も雨は小降ながら止

まなかつた、一つの傘に四人の身を託してはあらん限りの聲をしばつて關大造遙歌のコーラスに春の日の暮るゝを忘れるのであつた。一番元氣であつたのが橋本だ。今彼は戦線で活躍中だ。宇都宮、和田も勇壯だつた、地を踏み天を仰いで高吟した姿——箕面の尾根にかう／＼と吹く風、ふるへる青葉、河鹿の音と共に。三月十八日(九州帝大學生閱覽室にて)

### 山岳部 専門部一

#### 烏帽子から槍へ

七月十三日午後六時十八分、大阪驛を出發、名古屋にて中央線に松本にて大糸南線に乘換へ、十四日午前六時、北アルプスの表玄關信濃大町に到着、それより自動車にて葛温泉へ直行する。馬車軌道を濁小屋へと向ふ。濁小屋より高瀬川と離れ、濁澤の廣い頃を約三十分、烏帽子岳への登山口に着く、此からブナ立屋根の急坂を約六時間登行するのである。林に圍まれた美しい草地に殘雪のある見晴らしのよい烏帽子小屋には三時三十分着前方遙るか豊富な殘雪を誇る藥師、赤牛三ツ岳が鮮やかに立並が我々の眼を牽きつける。假松と砂地の廣い山稜を北へ迎つて烏帽子岳の最高點烏帽子岩に登る。悠々として行き交ふ白雲の動き、その雲の彼方に望む展望の素晴らしき、立山、劍、白馬連峯一望の下。嗚呼其の景觀、暫し茫然として我を忘る。

朝來強かりし風此頃より猛烈に吹き募る。天候の急變か、白雲矢の如く飛び去り、飛び來り、黒雲見る／＼空を覆ふ急ぎ小屋に歸る、遂に大嵐となる。小屋は音を立てて動き始め、無氣味な風の唸り益々強く、我々一同全く生きた心地せず一夜を明かす、十年來の暴風雨との事此處にて四國松高パーテイと一緒に十七日又もや暴風雨、自重して共に籠城に決す……

十九日、朝霧の中に槍の穂先、見えつ隠れつする。雄大壯嚴なる眺めである。待つ事暫し、陽光の下にその全貌を現はす、真近に見上げる其尖峰、血湧き肉躍るの感あり、六時過小屋出發、二百尺餘の岩壁を頂上へと攀じ登る。漠々たる雲霧の忽ち來り、忽ち去る、夏尙寒き標高三一八〇米、槍の頂上、遮るものなき其の眺望、見ゆる限りの山々は雄然と、聳え立ち、峰々を綴る雲海の壯觀、北方遙か腰籠の如き立山、劍白馬連峯から、近く野口五郎、赤牛、双六手に取る如く秀峰笠ヶ岳、指呼の間、西境の君主加賀の白山遣く雲煙の彼方に、南に乘鞍、燒

糠高。常念山脈東に聳え、雪上遙か紫に霞んで富士の山、萬岳怒濤の如く起伏する壯絶無限、雄渾極まり無き、大自然の神秘、九時層ノ小屋出發、急峻な岩場を雪溪を槍澤の雪融け水に咽喉をうるほし乍ら上高地へ、一ノ俣、徳澤を経て清流梓川の流れに沿つて棧道を丸木橋を、垣

々たる山道を降つて行く、上高地河童橋へは四時着、清い梓川の流れと白い頃の上に巖然と聳ゆる穂高の岩壁と燒岳の噴煙の美しき、感慨の情一入新らたなるものあり、小憩後バスにて、車上より大正池、燒、六百、霞澤山を眺め、上高地の霧圍氣を十二分に味はひつゝ梓川の急流に沿ひ島々へ、筑摩電鐵で松本へは午後八時着、飯田屋旅館にて一週間の汗垢を落し、一夜を静養す、二十日緩つくり市内を見物し夜行列車にて一路歸阪の途につく。

参加者  
小島、村上、川端、澤田、松田、村上  
森本、田中  
以上八名

### 僞學生に御注意

近時關西大學苦學生と稱し校友間を行商に巡り、誠しやかに同情を買はんとする者あり、現在判明せる處では、大阪市内に於て相當被害あり、又中京方面にも被害ある由、各位に於かれて十分御注意下さい。  
尙在學生は寫眞に校印押捺の「學生證」所持してゐますから、提示を求められた上、とくと御點檢御確證下さい。

校友會拂込者氏名 (其の五)

昭和十五年度會費

乾 稔	石田 具信	内山 寧隆	市邊淺治郎	笠原 憲夫	荒井 保一	江本 雄一	上村 敬之	菅 桂	淺田 三郎	尾上 千秋
植田庄太郎	木村 保雄	青野 龜三	岩橋 誠一	上田 博道	井原 真包	安藤 博重	宇野 忠雄	青山 佐太夫	山岸 一良	織田 正一
石川 寛永	入江 二郎	石田 龜三	井上 賢一	生橋忠三郎	板野 章夫	池田佐太郎	石井 晃男	森 清一	中井 頼重	笠置 省三
内海 潔	木村 興吉	垣内 真三	有留清太郎	市川 尙文	赤松 勝藏	白井 敬史	岩島 友一	坂本 吉平	坂本 辰治	尾崎 正弘
今里 達雄	今井 勝	伊藤 敷雄	大槻 靖彦	浮田 俊壽	和泉 義一	磯島 得一	今泉 勇	木村 鹿男	赤松徳治郎	奥野 清
今西 繁治	石原小四郎	岩見徳三郎	伊東 辰雄	神吉 董次	飯田 信造	植田 賢治	淺海 江浦	坂本 眞人	岡本 勝治	尾崎 克人
植松 博	小野幾太郎	井上 政二	梶川 直一	成川 政雄	坂根 寅夫	井關 弘	赤尾 保	仁禮 景實	山口榮太郎	長迫 寛一
池田 重一	伊東 順一	阿山 威	石富 正雄	中内 秀次	市原 久敏	織田秀三郎	永田 徳樹	野間 秀泉	伊谷 義明	上阪卯之助
井上 永次	小野田英男	辻 正夫	池田 正男	神山真次郎	長井彦五郎	安達 壽	今井 市藏	岡山眞之亮	天羽 強	今井 定一
泉 春夫	堀内 旭	中村光太郎	松本彦九郎	天池 茂	永井 利夫	小野 眞一	井村 達雄	大西 修	嶋田 次男	淺井 武夫
赤尾 道信	木村 儀八	山下喜代志	野島清太郎	石川 好美	石黒 純	坪 登己雄	森 悦三	嶋田 次男	川並 秀雄	岩村 福松
原田 三郎	保延 茂	中田克己知	大野 明夫	岩瀬 歳元	上阪 榮治	上野 義明	井村 勝雄	井村 勝雄	川並 秀雄	岩村 福松
谷口 利治	細谷 正士	井上 正臣	上原 正輝	石井 健太郎	永田正之助	南條 實	岸本 榮夫	井村 勝雄	川並 秀雄	岩村 福松
井上龜太郎	木村 馨	井上 正臣	植田 辰雄	谷川 康衛	池田留三郎	門脇 喜富	長友 尚一	井村 勝雄	川並 秀雄	岩村 福松
石隅 依義	氏田 洋	石田 芳春	植田 辰雄	谷川 康衛	池田留三郎	門脇 喜富	長友 尚一	井村 勝雄	川並 秀雄	岩村 福松
磯浦 真雄	石田 會次	井上 晋	池田 豊	奥西 茂樹	入江 雄次	櫻井 莊次	井倉 二郎	井村 勝雄	川並 秀雄	岩村 福松
淺島 武夫	青野 清信	植田 健	池田 豊	井上 丑松	淺田 次郎	葛城宗次郎	永田 敏男	上田 眞一	福岡 眞雄	沖 靜坦
小澤 宗	淺野 樹雄	伊東 信治	淺井 經夫	奥西 茂樹	入江 雄次	櫻井 莊次	永田 敏男	上田 眞一	福岡 眞雄	沖 靜坦
秋山 謙吉	梅田五郎	伊崎 信治	井關 靜夫	銀川 浩	今井 善正	朝川 正	二森 敬男	林 辰男	福岡 眞雄	沖 靜坦
井塚 吉雄	内田 俊雄	伊崎 信治	井關 靜夫	森 禎二	朝妻 嘉胤	朝田 正	上田 敬男	林 辰男	福岡 眞雄	沖 靜坦
上田 辰藏	梅田 忠夫	伊崎 信治	井關 靜夫	森 禎二	朝妻 嘉胤	朝田 正	上田 敬男	林 辰男	福岡 眞雄	沖 靜坦
石橋 國夫	跡見 保光	生田 勝太	今本 益雄	森 禎二	朝妻 嘉胤	朝田 正	上田 敬男	林 辰男	福岡 眞雄	沖 靜坦
上田 一郎	池田 明	岩井 秀一	井戸 一雄	森 禎二	朝妻 嘉胤	朝田 正	上田 敬男	林 辰男	福岡 眞雄	沖 靜坦
五十川直市	稻山 久彌	上田 泰通	植田浩太郎	林 英次	安藤 知久	森 實	釜井 富重	岡本 義男	中井 護良	中山 徳太郎
武田 利房	天見 勇	家光 正春	稻野治兵衛	稻村 金藏	嶋原 三治	久保 三郎	大西 幸夫	岩田 賢一	岩田 賢一	長尾 勝三
池田 利房	相繁 俊之	阿部 正三	東川基之資	中山 秀次	嶋原 三治	久保 三郎	大西 幸夫	岩田 賢一	岩田 賢一	長尾 勝三
岩崎正次郎	井上 吉定	油井 大三	堀之内三郎	岩田喜太郎	石丸 義雄	尾形 貞次	萩野 嘉平	岩田 賢一	岩田 賢一	長尾 勝三
青木 新一	上川喜一郎	犬伏 晟	堀之内三郎	奥田基之助	神納 庄一	南 喜一郎	久保 政雄	岩田 賢一	岩田 賢一	長尾 勝三
岩田浩太郎	浅野 繁雄	岩田定一郎	安達 芳郎	大西 夏介	谷本 惠二	岡橋 隆己	飯田 増太郎	岩田 賢一	岩田 賢一	長尾 勝三
井崎 政壽	尾谷 藤一	阿部 寛	小原 晃馨	中山 喜一	生信 秀雄	森 辰己	飯田 増太郎	岩田 賢一	岩田 賢一	長尾 勝三
浦元 康雄	荒瀬 信行	赤田 勤一	大西 雪房	大西 夏介	谷本 惠二	岡橋 隆己	飯田 増太郎	岩田 賢一	岩田 賢一	長尾 勝三
伊丹外三郎	石井 芳雄	井道 正文	安藤伊重郎	石田 清俊	浅野 祐	今野 正二	梅垣 貞一	岩田 賢一	岩田 賢一	長尾 勝三
井置 武嘉	上西嘉太郎	遠藤 三郎	阿部 禮治	織田 九郎	永島 房二	久田見義男	奥野 爲信	岩田 賢一	岩田 賢一	長尾 勝三
安藤 豊助	井上 善一	仲島 忠次	石橋市太郎	山上 三郎	秋田 政一	伊藤 又治	赤木 壽男	岩田 賢一	岩田 賢一	長尾 勝三
宗 忠治郎	飯盛 秀心	小野 公生	荒牧 善平	角谷 利之	金田 誠三	今井 輝夫	林 秀一	岩田 賢一	岩田 賢一	長尾 勝三
杏中 一雄	江本 文男	出原 保正	角野助之丞	尾下 瀧雄	勝原利彌壽	今井 輝夫	兼松 豊	岩田 賢一	岩田 賢一	長尾 勝三

經濟學士 吉田秀夫 著

新刊

# 新マルサス主義研究

菊判上製箱入  
定價貳圓貳拾錢  
送料拾四錢

序言に曰く

今日の世界は、そして又日本も「生ヨ繁殖」の時代である併しこの時代が現れる前には受胎制限による産兒抑制を樞軸とする新マルサス主義が大きな勢力を占めてゐた時代があつたので有り、本書は新マルサス主義を正しきものとして推奨し又は提唱するにあるのではなく一つの經濟學說としての新マルサス主義を理論的に且つ歴史的、批判的に追及する目標である……資料の點に就いて一言すれば……本書の執筆に必要と考へた限りの資料はほんの一、二を除けば（重要なものでない）何れもこれを殆んど全部利用し得た、特に最も根本的の資料の一たる「マルサス主義聯盟」の機關誌「マルサス主義者」の長期に亘る多數のバック・ナンバーを十分に利用し得たことはひそかに誇り得べきことであらうと考へてゐる……

## 近刊豫告

商學士	中井眞太郎著・有限會社法論
關西大學教授	森川太郎著・銀行業務と信用理論
神戸商大教授	丸谷嘉市著・價值及價格研究一斑
商學博士	

關西大學學報 第百八十三號 (昭和十五年十月十五日發行)

株式會社

## 大 同 書 院

東京駿河臺中央大學前  
振替東京一八二一三番  
電話神田二二二八番

大阪區北區  
大田一三番  
替電北一五番  
道新七五番  
番二三五番